

総合工学委員会原子力安全に関する分科会
社会のための継続的イノベーション検討小委員会
第25期・第14回議事要旨

令和5年6月8日
作成 山本 章夫

1. 日時 令和5年6月8日（木）16:00～17:00
2. 会場 遠隔会議 オンライン開催
3. 出席者 松岡委員長、越塚副委員長、関村、矢川、白鳥、宮野、山本、澤田、吉村、（小野、佐倉、中村欠席）
4. 配付資料
 - 資料1 前回議事録
 - 資料2 記録案
5. 議事
 - 1) 議事録確認（資料1）
 - ◎議事録を確認した。コメントなく了承された。
 - 2) 記録案の審議
 - ◎ 報告・提案に向けての論点について、科学的助言等対応委員会の指摘事項に基づき議論を行った。
 - ・報告・提案に向けての今後の対応として、関連する学術会議の報告書を確認、小委員会の体制の拡充、本文の記述に関する論拠の明確化、結論に関する主張の明確化、主張などを裏付けるデータや引用などが不十分、などが必要。
 - ・今期の活動としては、資料2の記録案をベースにして取りまとめる形ではどうか。なお、記録として残す場合についても、査読は必要となる。
 - ・記録として活動を残すとともに、来期に向けての申し送り事項をまとめておく必要があるのではないか。
 - ・体制をどの程度拡充することは難しい問題。例えば、参考人として多様な方に議論に加わっていただくことも考えられる。定常的に議論を行うメンバーはあまり増やさない方が良くかもしれない。
 - ・現在の記録案は、要旨を読んだだけでは本文の内容がなかなか伝わらない印象。内容は概ね良いとして、記載してあることを具体的に実行するために何をすれば良いのかももう少しブレークダウンし、具体的に役立つ形にする必要がある。
 - ・今期から、意思の表出の方法を大きく変更した。学術会議が発出する報告書としてどうか、と言う観点が重視されている。
 - ・指摘事項については、限られたメンバーでの議論で内容を取りまとめているのでは、

という点が根本的なポイントではないか。

- 「イノベーション」を議論している分科会はいくつかあり、また過去にもある。そうすると、学術会議としてどのようにイノベーションを捉えているのかが曖昧になるという可能性があるのではないか。例えば他の分科会と意見交換し、コンセプトを普遍化する、などのアプローチがあり得る。また、その結果を次期の議論に反映するなど。
- あるいは、もう少し議論を絞るのであれば、原子力を中核とするアプローチもある。
- 指摘事項については、小委員会で共有することは問題ないのではないか。これに基づいて、来期にかけてしっかり議論していくことが重要。
- 論旨のエビデンスをしっかり示すことで、訴求力を上げることが出来る。
- 記録としていったん残し、これをさらに発展させることが重要ではないか。他のグループの意見を聞くなどのアプローチが良さそうに思う。
- 中核となっている「エコシステム」の中身が見えにくいこともあるのではないか。
- 他の分科会の例だと、例えば産業界や政府などに意見を聞いたりした例がある。アンケートなども取ってエビデンスにしたりもしている。
- 内容について大きな問題があるというのではなく、内容を深掘りしていくことを助言して頂いているという理解である。様々なグループから積極的にご意見を頂くことが重要。

3) 今後の進め方について

- ◎ 記録として今期の作業を進める。
- ◎ 来期に向けた課題や論点を整理し残しておく。
- ◎ 次回は委員長が別途メールで日程を調整する。

以上